

平成 20 年 3 月期第 2 四半期決算発表

平成 19 年 10 月 29 日 16:00~17:00

於:ベルサール三田

お断り:このメモは、決算説明会にご出席になれなかった方々の便宜のためにご参考として掲載するものであり、説明会でお話したことの全てを一字一句書き起こしたものではありません。当社IR・広報グループの判断で、簡潔にまとめさせていただきました。ご了承ください。また、最終頁の注意書きもあわせてご覧ください。

【CFO 江間より決算概要の説明】

<第 2 四半期(7~9 月)の連結業績>

経営成績

売上高:	1,009 億 80 百万円	(前年同期比、1.9%増)
営業利益:	268 億 49 百万円	(同、4.5%減)
経常利益:	281 億 19 百万円	(同、9.4%増)
四半期純利益:	210 億 20 百万円	(同、8.2%減)
1 株当たり四半期純利益		48 円 64 銭
潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益		48 円 55 銭

四半期連結損益計算書

- ・ 売上高は、四半期過去最高でした。為替の影響で上振れています。
- ・ 四半期当期純利益は、昨年、土地の売却益がありましたが、当第 2 四半期はそれがないので、減益です。
- ・ 為替の影響は、当四半期の業績を、前年同期のレートで換算したものと当期のレートで換算したものを比べた場合、売上高で 15 億 17 百万円、営業利益で 15 億 92 百万円、経常利益で 18 億 68 百万円、当期純利益で 16 億 19 百万円、この分だけ体が大きく見えています。
- ・ 為替の影響を除いた事業活動ベースの成績は、グループ全体の売上高は前年同期で 1.9%の増収ですが、この内、為替の寄与分が 1.5%です。差額の 0.4%(384 百万円)が事業活動による増収分です。事業別では、EO(エレクトロオプティクス)が 20 億 70 百万円の減収(前年同期比△2.1%)、VC(ビジョンケア)で 10 億 23 百万円の増収(同+1.0%)、HC(ヘルスケア)で 14 億 53 百万円の増収(同+1.5%)です。ポートフォリオで見ると、EO が下がった分をアイケアでカバーしたということです。
- ・ 営業利益では為替の寄与分が 5.7%で、為替を除いた事業活動ベースでは、28 億 69 百万円の減益(前年同期比△10.2%)です。事業別では、EOで 36 億 93 百万円の減益(同△13.1%)、VCで 1 億 72 百万円の減益(同△0.6%)、HCで+5 億 18 百万円の増益(同+1.8%)でした。

製品別伸び率(実績)

製品群	当第2四半期 前年同期(2Q)比 伸率(%)	当第2四半期 直前四半期(1Q)比 伸率(%)	中間期 前年同期比 伸率(%)
blanks	11.8	1.5	12.3
LSI マスク	4.8	△0.3	8.1
LCD マスク	△16.7	△2.2	△14.6
MD	△11.7	20.8	△13.1
光学	11.6	3.2	14.2
メガネレンズ	6.0	△3.1	9.7
日本	△3.9	3.0	△2.4
北米	7.5	△5.9	11.1
欧州	8.9	△7.0	14.6
アジア	22.2	2.8	24.9

- ・ LCD(液晶)マスクが単価の下落に加え生産効率が悪化していましたが、第1四半期(1Q)をボトムに回復しており、現在回復途上です。引き続き単価的にはマイナス圧力が強いです。
- ・ MD(HDD 用ガラスメモリーディスク)は、収益的にマイナス面が大きく、売上也落ちており、単価と技術(垂直磁気記録方式へ移行する)問題がまだ完全には解決していません。ただし、1Q に比べると、2Q は回復しています。2Q は回復途上にあるとご理解いただければと思います。

財政状態

総資産： 6,836 億 10 百万円
 純資産： 4,019 億 07 百万円
 自己資本比率： 57.5%
 1 株当たり純資産 908 円 55 銭

キャッシュフローの状況

営業活動によるキャッシュフロー： 304 億 50 百万円
 投資活動によるキャッシュフロー： △841 億 20 百万円
 財務活動によるキャッシュフロー： 929 億 30 百万円
 現金及び現金同等物期末残高： 1,661 億 08 百万円

- ・ ペンタックス(株)との経営統合に絡み、9 月末のペンタックスのバランスシートを時価ベースで連結しています。今後ののれんの償却対象資産および償却期間をご説明しますと、ペンタックス(株)の純資産簿価 451 億円、時価純資産の増加額は 79 億円で、合計すると 530 億円で、このうち HOYA の持分は 481 億円(90.62%※)です。差額の 49 億円が少数株主持分です。HOYA は TOB でペンタックス株式の 90%超を 948 億円で購入しましたので、これから HOYA の持分 481 億円を引きますと、のれんが 467 億円となります。償却対象資産は、のれん 467 億円、特許権等を時価評価した 135 億円、すでにペンタックス(株)で持っているのれん 67 億円があり、合計すると 669 億円となります(日本基準)。償却期間は、特許権等の時価評価の分が 8 年、その他が 10 年です。10 月 1 日以降、定額償却していきます。(※注：ペンタックス自己株式保有分を含む)

中間配当金

- ・ 中間配当金(2007年9月期)は、1株当たり30円です。連結ベースの配当性向は34.0%です。
- ・ 配当性向は、前年、前々年も同水準でした。3分の1程度を株主に還元するということです。
- ・ 昨年は、中間配当金が1株当たり30円、期末配当金が同35円で、合計65円でした。今年の中間配当金は、減益ではありましたが、昨年の中間期と同じ金額とさせていただきます。

【CEO 鈴木より業績概況の説明】

＜ペンタックス(株)との合併について＞

- ・ 本日、2008年3月末付でペンタックス(株)と合併すると発表しました。TOBで90%超を取得した残りの分を、1株当たり現金770円で購入する形になります。
- ・ 子会社ではなく、何故合併なのかというのは、ペンタックス(株)のカメラ事業も800億円を越える規模で、メディカル事業も500億円という大きな事業になっており、HOYAの各事業と同じ扱いにしていきたいと考えているからです。特に投資を行う場合、ペンタックス(株)の枠組みの中で投資を制限したくないということもあり、運営上はペンタックスというグループを1つの枠組みとしてやって行こうと思っておりますが、投資の意思決定をするときに、ペンタックスのバランスシートを意識したくないということも含め、特にメディカルの部分にこれから投資していくことになるので、他の事業と同じ枠組みの中に入れていきたいということで、合併にしました。

＜半導体(LSI)製造用ブランク／マスク＞

- ・ 日米はフラット。東南アジアが増えましたが、東南アジアの得意先の在庫調整が前期にあって、その反動が大きいです。
- ・ 32nmの方向性はまだ決まっていません。二重露光というのはだいたい決定していますが、どのようにパターンを切っていくかは決まっていませんし、会社によって色々やっています。
- ・ 半導体は、国内のマスクは2Qは不調でした。開発が遅れている感じです。古い製品については量産でまわっていて開発品が出てこないし、先端領域では何を作るべきか迷いがあるという雰囲気開発が遅れている感じです。

＜液晶(LCD)用大型マスク＞

- ・ 国内はあまりよくなかった。理由は決算対策だと思います。費用を絞るために、9月頃にマスク発注の動きが止まってしまったことで、結果的に国内はよくなかったです。
- ・ 台湾系の中小型は割としっかりしていて、最悪期は脱しました。同じような話を3ヶ月前にもしましたが、全般的に価格も中小型のところは安定しており、1,200mmといった大型サイズのところが若干まだ価格が落ちています。全般的には価格は落ち着いてきたようです。

＜HDD用ガラスディスク(MD)＞

- ・ 125GB製品が量産で動き始めています。ドライブメーカーさんも開発ではご苦労されているようです。その影響でメディアがいま一つ出ない。2.5インチのドライブがタイトなので価格が下がらないというのは皆さんご存知だと思いますが、部材が足りないということもあろうかと思いますが、その他にも色々あるようです。
- ・ サブも供給不足気味になっていますが、不足気味に見えるのはPCメーカーさんが多目に発注なさっていて、その多目に発注されている分が供給不足に見えるのではと思われます。それ程サブは引きが強いということです。

- ・ 当社業績は、1Qを底に2Qは良くなっています。
- ・ 収益的に足を引っ張ったのはタイ・パーツ高で、MDだけでなく、光学やVCも含め、タイでのオペレーションが多いので、みな影響を受けました。

<光学レンズ>

- ・ 調子良いです。引きが良い。
- ・ 携帯用はいま一つですが、デジカメの需要でほぼカバー出来ています。
- ・ 一眼レフとコンパクトカメラで、調子が良いです。
- ・ 本来ならクリスマスを過ぎた4Qで下がるはずですが、今年は4Qも良さそうです。デジタルカメラ各社が来年のモデルを前倒しで進めており、早いメーカーで1月から来年のモデルに切り替わり、それ以外のメーカーも2月が中心になるでしょう。例年、お正月はゆっくりしていた人も、今年はお正月から仕事をするような雰囲気になっているようです。4Qは悪くなさそうです。

<ビジョンケア(メガネレンズ)>

- ・ 2Qで心配したのは、夏くらいから欧州で調子が良くないということです。これは当社だけではなく市場全体が調子良くないようです。過去1年半くらい、ヨーロッパ市場がVCの業績を牽引してきました。為替の影響もありましたが、市場そのものが割と膨らんでいた感じがします。それが夏頃から成長が落ちているような感があり少し心配しています。
- ・ アメリカも東南アジアも堅調です。日本は若干縮んでいますが、収益的には安定してきています。
- ・ 数字的に意外感があったのは、収益がもう少し出るかなと思っていました。1Qが低かったのもその反動で、もう少し良いかなと思っていましたが、パーツ高の影響を受けていることもあるようです。もう少し収益を上げたいと思っています。

<ヘルスケア(コンタクトレンズ)>

- ・ 直営の小売店舗は、既存店ベースでもしっかり売上が伸びています。
- ・ 今年度後半に出店を加速しますので、今の成長と収益性をキープできるでしょう。

<下期の全般的な印象>

- ・ ざっくりとした印象で、下期はそんなに悪くならないのではと思っています。クリスマスがどうなるかはわかりませんが、それなりの消費の盛り上がりはあるだろうという前提があります。4Qが心配ではありますが、そんなに心配しなくても全般的に品物的にはタイトですし、最終製品そのものもタイトな状態になっているようです。テレビの大きなサイズは別として、それを除けば全体的にタイトなので、4Qもそんなに大きな調整が入る感じではないと、今のところは見えています。

【ペンタックス(株)社長谷島より業績概況の説明】

- ・ ペンタックス(株)の中核三事業、医療用内視鏡を中心としたライフケア事業(LC)、デジタルカメラを中心としたイメージングシステム事業(IS)、オプティカルコンポーネント事業(OC)、これらの事業の上期について、業界全体の環境と当社の業績(前年同期比)をご説明させていただきます。
- ・ ライフケアは、医療用内視鏡は前年度から引き続き大きな変化はありません。当社は2Qから北米市場に消化器系内視鏡のiシリーズを投入し巻き返しを図っております。この製品は非常に好調ですので、下期に欧州市場にも投入し下期も期待できると考えています。
- ・ デジタルカメラ市場は、デジタル一眼と交換レンズを中心に好調です。競合各社がデジタル一眼

レフを上期に投入しましたので、好調といえども、下期から来年にかけて一眼レフ市場も加熱してくるのではないかと考えています。

- ・ コンパクトデジタルカメラは、年々拡大を続けており、そろそろ停滞するのではないかと、実際には 2 年前くらいから、伸び率が停滞してきましたので、今年は厳しいのではないかと懸念はありましたが、買い替え需要、新規市場での販売が伸びており、需要自体はコンパクトデジタルカメラも底堅いと感じております。
- ・ 各社が製品を出しておりますので、市場加熱から単価下落というものが加速するのではないかと懸念はあります。
- ・ オプティカルコンポーネント事業では、デジタルカメラモジュールという、カメラのレンズとその鏡筒部分になるコンポーネントを出していますが、非常に引きが強く、3Q に向けたカメラモジュールの受注も増加しています。
- ・ オプティカルコンポーネントの中に含まれる、ピックアップレンズ(DVD のピックアップモジュールに組み込まれる微小レンズ)は、前年度から納入先からの単価の引き下げ要求が強く厳しい状況です。製造コストの削減努力を図っていく予定ですが、上半期は厳しかったです。
- ・ HD-DVD 用のレンズは新しい製品群になりますが、上期にこの量産の立上げに苦労した部分がありました。下期は順調に伸びていくように頑張ります。
- ・ 全体的には上期の売上高 856 億 89 百万円(前年同期比+14.8%)で、各事業部が伸びていますが、主な理由としては、IS のデジタルカメラ、デジタルカメラ用の交換レンズ、アクセサリなどの売上増が寄与したと考えています。
- ・ オプティカルコンポーネント(デジタルカメラモジュール)の売上も伸びました。
- ・ 地域としては、欧州、アジアの売上が、前年同期比で伸びています。
- ・ 営業利益は、当中間期 33 億 37 百万円(前年同期比+114.7%)でした。
- ・ 上期の実勢レートは、1ドル 119.16 円、1ユーロ 162.29 円でした。前年同期比では円安になっています。
- ・ 為替の影響は、売上高で、33 億円の増加、営業利益で 15 億円の増益でした。
- ・ セグメント別には、内視鏡を中心とする LC 事業で売上高 214 億 60 百万円(前年同期比+13.7%)、営業利益 16 億 32 百万円(同+56.1%)でした。欧州市場においては、既存製品でコストパフォーマンスに優れた内視鏡、超音波内視鏡、自家蛍光内視鏡、共焦点内視鏡など先進的なモデルを出していきまして、これが昨年度に続いて寄与したと考えています。
- ・ 通常タイプの内視鏡で、i シリーズという製品を 2Q から北米に出荷していますので、これが今後も伸びていくと考えています。
- ・ IS 事業は、売上高 428 億 52 百万円(前年同期比+15.4%)、営業利益は 24 億 63 百万円、2006 年 11 月から発売している一眼レフデジタルカメラの K10D の評判が良く、カメラ・交換レンズが国内外ともに好調でした。
- ・ デジタル一眼レフカメラの上半期の販売台数は、18 万台でした(前年実績 11 万台)、コンパクトデジタルカメラは 130 万台(前年実績 139 万台)でした。コンパクトは前年に比べ 9 万台減少しましたが、当初の計画時における数字は 118 万台でしたので、昨年より減りましたが、当初我々が想定していた数量よりは伸びました。売上やマーケットシェアより、内実を重視していこうということでやっていて、その現れでもあると思っています。
- ・ OC 事業は、売上 184 億 60 百万円(前年同期比+22.8%)でした。微小レンズは単価下落がありましたので、三事業部の中では、唯一営業利益で前年同期比 8.2%減少して、12 億 24 百万円となりました。

- ・ 所在地別で見ますと、欧州・アジア地域で売上が伸びました。営業利益では、欧州・日本が対前年同期比で増益となりました。当中間期の海外売上比率は 84.2%でした。
- ・ 会社全体では、経常利益で 28 億 20 百万円(+167.4%)でした。
- ・ 中間純利益は、たな卸資産の評価損を含め特別損失も計上したこと等により、5 億 86 百万円となりました。

【質疑応答】

Q: 短期と長期の新しい収益構造、ターゲットとする収益水準のイメージは？ 短期的にはペンタックス側が下期から連結されて、ストリート・コンセンサスの営業利益 1,150 億円はインラインで行けるでしょうか？ 長期的には、セグメントがミックスされていて、5 年後、内視鏡市場の規模やカメラに対する取り組みをされた後の見込まれる収益の水準についてイメージは？

A: (鈴木 CEO) 短期的なイメージは、3 ヶ月後に発表しますので、その時にお話させていただきます。ペンタックスそのものもそんなに悪くないですし、どうしてもシーズン性がありますので、3Q で上がって、4Q で下がりますが、上期・下期で見ると歴史的にもシーズン性から見ても、下期の方が良いという展開だと思えます。イメージとしては特に悲観はしていません。長期的なイメージは、12 月を目処に次の決算発表のときにお話をさせてもらえばと考えています。内視鏡というのは、本来収益性が高い事業だと思っています。色々ペンタックスは製品開発で難しい面があり、一定期間苦しい時もありましたが、産業構造だけを見ると収益性の高い事業であると思っています。

Q: 谷島社長にお聞きします。HOYA は厳しい会社ですが、鈴木社長や江間 CFO の要求が理不尽だと思ったときにどのように対応するおつもりですか？ 以前、鈴木社長が「ペンタックスの現在の営業利益率 5~6%を、2~3 年くらいで 10%くらいにしていきたい」と言っていたと思いますが、のれんを除くとそのくらいは達成可能ですか？

A: (谷島社長) 鈴木社長や江間 CFO から理不尽な要求はいただいていません。これからということでしょう。ペンタックスとしても中核三事業の事業そのものを強化して、事業によっては、非常に大きな先頭集団がいますので、少しでもそこに近づいていく、必ずしもボリュームの問題ではないかもしれませんが、医療器、カメラ、オプティカルコンポーネントが強くなっていくということでは、ペンタックスにとってもやっていかなければいけないことですし、やれると思っています。今回 HOYA の中に入っていくことで、これを 1 つの大きな飛躍のチャンスとして、さらなる拡大・強化につなげて行ければと考えています。具体的な数字のイメージは現在事業ごとに、大きい・小さいに関わらず、全ての事業に関して議論していますので、その中から 1 つの方向が出てくると思います。方向が出てきた段階で、それを数字に落とし込むとどうなるのか、そのような議論が 1 ラウンド終わった段階で見つめる必要があると思います。今の段階で「利益が何%」と言うより、事業の形がどうなっていくのかということに議論のほとんどが費やされているという状況です。HOYA の各事業部のレベルに少しでも近づければと思いますが、事業領域として形は異なりますので、それらも含めこれからの話ということになると思います。

Q: 今後の業績の方向性は？ 環境的には液晶パネルも良くなってきていて、ノート PC もそれなりに、デジタルカメラも良くて、ただ過去 2 回は MD のところで期待をはずされてしまいましたが。イメージでいいので、半導体・液晶市場の先行き見通しを交えながら、HDD 関係でこれ以上リスクがないのかどうか等、今後 V 字回復が出来るのかどうか等コメントをお願いします。

A: (鈴木 CEO) 下期、特に 4Q の調整は少ないと思っています。PC もそうですし、全般的にそうです。半導体もおそらくそうでしょう。そんなに大きく半導体の状況は変わらないと思います。DRAM は苦しんで

いるようですが、状況的に大きく変わるわけではないでしょう。ファウンダリを見てみると割と量産に走っている感じがします。チップの引きは良いのだろうと感じます。下期のチップはそんなに悪くない。むしろ液晶の方が心配です。液晶市場の上期の決算はおそらく良いでしょうが、足元ではパネルの大型サイズの方は重くなってきている感じです。小さい方は相変わらず元気で値段も高いです。テレビ用の大型パネルはクリスマス後に在庫が残る心配があります。そうなると数量は出ても値崩れする可能性があるかなと思っています。HDD は、160GB の開発次第であり、各社苦しんでいます。我々もなかなか届かない。もう少しのところで今各社一生懸命やっていますが、4Qに160GBの量産ベースでどのメーカーが立ち上がるかということ、メディアだけでなく、ドライブそのものが立ち上がって製品がちゃんと作れるかどうかというギリギリのところに各社来ているような感じがします。120GB では、今の収益はHDDメーカー各社良いと思います。これが4Qに入って160GBに移行して行く時に、ちゃんと出せるかどうかということと、まず開発がスケジュール通りに進むのか、また量産ベースに入った時にちゃんとした歩留まりで出荷できるのかが勝負どころだと思います。2.5 インチのドライブはタイト感がある状態がしばらく続くと思います。歩留まりも含め生産的に製品が出せないの、容量の多い製品が潤沢に出るという状況にはならないだろうと感じています。

Q: 減価償却が第1四半期と比べると8億円減少していますが、設備投資が下がっていきなで第1四半期がピークだったと考えていいのでしょうか？年間の設備投資の見通しを教えてください。

A: (江間 CFO) 減価償却は当初の予定で420億円くらいとお話しましたが、若干検収が遅れているものがあり、今は410億円ちょっとくらいかなという感じです。設備投資は400億円で、7月にお話したときと変更ありません。

Q: 2Qで、120GBの比率はどのくらいでしたか？シェアはどのくらい戻ってきたか？3Qもまだ2Qより利益改善の余地があるのでしょうか？

A: (鈴木 CEO) 2Qの125GB比率は大きくなかったです。2Qの中ごろに認定が終わり、90GBから125GBに移り始めた感じですから、比率は大きくなかった。当社の得意先の立上げが遅かったということもあり、思ったほど125GBに移行していなかったということです。物量的にはそこそこ動き始めているが、収益的にはまだ厳しく、特に前年の良い時期に比べるとコストを掛けながら作っていて、歩留まりは上がってきていますが、機械あたりの生産性が落ちていることや、使っている材料についても聞いたことがないような材料が増えてきて、材料費(膜を飛ばす貴金属)の値段が上がっているということもあり、コスト的には苦しい状況です。ただ、物量的にまだフル稼働ではなく、2Qで稼働率は8割くらいで、よくなる余地はあると思っています。

Q: 2Qは液晶マスクが直前四半期(1Q)比で $\Delta 2.2\%$ 、MDが $+20.8\%$ でしたが、1Qのときのガイダンスの際は、それぞれ液晶が $+9.3\%$ 、MDが $+12.0\%$ という見込みでしたので、液晶が予想よりは少し下で、MDが上だった背景をうかがいましたが、今回1Qから2QにかけてEOで40億円増益になっていますが、増益のドライバーはこれの中で何がもっとも寄与していたのでしょうか？利益面で上に押し上げたものと、下に押し下げたものがあれば教えてください。3Qは売上が伸びれば利益も伸びるということでしょうか？

A: (江間 CFO) MDの改善のウェイトが大きいです。この製品は認定が絶えずつきまといまいます。ラインの認定があつて、生産が始まります。内部的にも作り方が上手くなくてロスがあつたことと次の開発品、さらにその次の製品もターゲットに入れていきますので、初期投資のウェイトも大きいです。MDの回復が同じようなウェイトで出ており、貢献は大きい。3Qの見込みはまだ発表していませんが、そういう前

提であれば、売上が伸びれば利益も伸びるということになると思います。

(鈴木 CEO) 足元だけを見ると、思ったほど良くなっていないという印象です。液晶パネルそのものは良くなっていますが、マスクは思ったほどは出ていない印象です。4Q から、得意先で新しいファブに増産設備を入れたところがあり、そのように新しい設備が入るとマスク需要は増えますので、来年の上期になると現在稼働している分に加え増産設備した部分に乗ってくるのかなというイメージを持っています。

Q:HDD のサプライチェーンの中での競争環境の中において、HOYA にとっての MD の位置づけは？今後の考え方は？買収してでも拡大するのでしょうか、縮小するのでしょうか？

ペンタックスとの合併で今回たな卸資産の評価損を出していますが、合併するにあたって身綺麗にしていると思いますが、これ以外にも出てくる予定ですか？

A:(鈴木 CEO) HDD 市場で合従連衡が起こり得ると思っています。当社と当社のお客さんも含めて流動的な状態で、産業そのものが流動的な形になっているのではないかと思います。そのような状態で 2~3 年後の絵は描けず、様子待ちで、周りを見ながら自分の立ち位置を考えなければいけないと思っています。メディア事業は元々大きくしようとする気はありませんと申し上げています。技術がガラッと変わるときに前の設備が使えなくなって、その時にやめるかやめないかという、メディアをやっているからサブがあるということもあるので、大きくはしないが、その時にあった大きさの仕事は続けていきたいと思いそのための新しい投資はします、という考え方でしたので、売上は減ってしまいましたが、今の売上サイズが当社にとっては落とし所だったのかなと思います。今後も、よほど環境や競争力が変わらない限り、アクセルも踏まずブレーキも踏まずという状態を想定しています。

(谷島社長) (たな卸資産について) この機会に、従来のものもバーを上げて見て行こうという中から出てきた評価損です。今後は出てこないはずと考えます。

Q:HOYA のマネジメントがペンタックスの経営に関与し始めたのはいつ頃ですか？ペンタックスの事業は各事業が計画より良かったですが、すでに HOYA 効果が出始めているのでしょうか？それとも純粋にペンタックスの実力なのでしょうか？

A:(谷島社長) TOB が成立して 8 月 14 日に HOYA がペンタックスの 90% 超を保有する株主になった段階くらいから、各事業部との話を続けて来ました。8 月以降ということになりますが、HOYA から各事業への細かい指示はありませんでした。しかしながら、そのような状況下で新しい視点というものも HOYA からいただいたこともありますので、それらを含んだ総合の結果ではないかと思います。

(鈴木社長) 今のところ、ペンタックスさんの実力です。

以上

本資料中には将来の当社の業績・当社を取り巻く業界の環境に対する予想の部分が 있습니다。これは当社および当社グループが現時点で入手可能な情報から得られた判断に基づいておりましたが、リスクや不確実性を含んでおり、その内容の完全性・正確性を会社として保証するものではありません。従いまして、これらの予想の部分に全面的に依拠して投資判断を下すことはお控えくださるようお願いいたします。実際の業績・業界環境は、様々な要素により、これら予想とは大きく異なる結果となりうることをご承知おき下さい。投資等の最終決定は、ご自身の判断でなさるようお願いいたします。投資の結果に対する責任は負いかねますのでご了承ください。